

書評：川はどうしてできるのか

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 和田, 秀樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024570

書 評

「川はどうしてできるのか」

藤岡換太郎著

講談社ブルーバックス, 860円 + 税, B1885



本会会員藤岡換太郎著、講談社ブルーバックス“川はどうしてできるのか”の紹介をしよう。地球の営力が作ってきた海と山がどのようにしてできたかに続く地形の不思議をまとめてきた‘地球のどうしてシリーズ第3弾’である。これら不思議の内容は、川が日頃身近であるだけに、ふと思い起こすと変なことに気づき寝られなくなれば本望かもしれない。

川の流れる日本にあっては変化に富む清流、知らずして恩恵を、あるときは翻弄される。何気ない川の流れると流れの作った地形とその機能のおもしろさや不思議な地形を取り上げ、地球とその地のダイナミックな鼓動と時の流れである地形進化の関係を質（ただ）してゆく。もちろん、陸上の生き物にとって淡水がなければ生きることにはできない。同じ水でありながら、海と陸と生き物に異なる働きを進化させ現在がある。

川のイメージは、大陸に住む人々と日本人のそれとは、桁違いに違う。ヒマラヤを乗り越えるブラマプトラ川と、丹那の断層運動に翻弄されるかわゆい柿沢川とは、規模があまりにも違いすぎるが、原理は同じ地殻活動と川の削剥の速度の違いによるという。悠久の時間をかけた地殻変動とそれに翻弄された大河の姿はまさに地殻変動の生きた証人だ。そこに働く地球の営力が作り出す地形を、どうしてこうなっているのだろうかと立ち返る展開は、藤岡さんの遺伝子がそうさせているのかもしれない。

自然現象を解説する本の構成としては、構成趣向が変わっている。川をめぐる13の謎として川の特徴を整理した上で、それぞれの特徴を拾い出している。元々川というのは陸に降った雨の行き着くまでのつかの間の水の流れ。川の道筋はなにがしかの理由があってそこを流れている。川の水（地下水を含め空からの贈り物“天水”と呼ぶ）を糧に地上の生き物は生きながらえている。川は大河も小川もなにがしかの類似性があるようで、それらをわかりやすく整理してくれる。そこには川独特の由来と特徴がある。

本は3部構成で、1部は先に述べたように13の川にまつわる謎を小題に、川の姿の成り立ちを説明する。2部は身近な多摩川を探検する。これはどなたもどこでもやれる。3部は、時間をさかのぼる川の進化か？具体的な、天竜川や、多摩川の源流を探すとというのは、その内プラタモリでも取り上げるようになってくれたら番組内容の大きな進化だ。そして、読者の身近な川の源流への旅を誘（イザナ）ってくれ、身近な不思議を見つける新たな楽しみ方ができるだろう。この本に触発され、静岡の川の新たな知見を会員にも書いていただければと思う。是非一読してみてください。（和田秀樹）